

プロローグ

これは、シャアがネオ・ジオンを名乗のりアクシズを地球に落下させようとした戦いから数年後の話である。

ハマーンはZZの最期でシャアに救出されて生き残っており、シャアとの間に出来た子供と共に、アルテイシア・マイネという人間の戸籍を所得し、サイド6にてひっそりと暮らしていた。(注：当サークル発行の「静寂な宇宙」を参照するか、ネット上で公開されている同作品を探して参照の事)

もちろんハマーンが生存しているという事が判明すれば、戦犯としてそれなりの処罰は逃れられないだろう。だが、中立サイドであるサイド6にいる限り地球連邦側としては、身柄の束縛が事実上不可能であるばかりか、公式的に彼女自身死亡扱いになっている為、捜索隊が組まれる事も無かったのである。

また、地球連邦側としても、ティターンズやエウーゴが存在した時代は、事実上連邦自身の内紛状態にあった訳なので、余りその時代の出来事を詮索したく無いという事情もあった。

その為、ハマーンは割と周囲を気にする事無く自由に行動出来たのである。(もちろん外出時は、当然ながらそれなりの変装はしているし、髪型も変えている)更にシャアの反乱が起きた後なので、民衆の誰もがそれ以前の話題を語る事は無かったのである。

そんなある日、ハマーンが一人で街へ買い物に出かけている所から、この物語は始まる。

再会

「さて、必要な物はこれで全て揃った筈だわ。夕飯までかなり時間があるし、これを車に入れてどこへ行こうかしら…」

サイド6のとある街にて、ハマーンは久しぶりの外出に心を躍らせていた。シヤアとの間に出来た一人息子のハリーは、彼女にとってこの上ない幸せと安らぎを与えてくれてはいたが、他の人との接触が殆ど無い生活を送る事は、どうしてもアステロイドベルトでの辛く寂しい日々を連想してしまい、心が塞ぎがちになってしまっているのであった。その為、定期的に気張らしも兼ねて出歩くようにしていた。サイド6は今でも中立サイドとしての役割を果たしており、自治権を確立した国家として機能していた。戦争とは無縁の場所である為か人々も開放的で、それがハマーンにはとても新鮮に感じられた。

いつもの様に繁華街で買い物をして、車が停めてある場所へ移動しようとした時、彼女の心にふと懐かしい思念が飛び込んできた。当初はシヤアやアムロなのかとも思ったのだが、それとはまた別な、純粹に心が温まる思念だった。ハマーンは少しソワソワしながら辺りを見回すと、露天のジュース屋の前で、仲間と別れて一人別行動を取る人物が目飛び込んできた。月日が経っている事もあり、かなり大人びている感じはしたが、その漂う雰囲気は以前と全く変わらない男がそこにいたのである。

彼はジュースを注文した後、その前にあるパラソル付きのテーブルに腰掛けて、ため息を一つ付くと楽しそうに周囲を眺めていた。ハマーンはその男が彼だと確信しながらも、あくまでも慎重に偶然を装いながら近付き、ジュースを買った後にこう声を掛けたのだった。

「前の席……空いてるかしら？」

「え？…どうぞ……」

その男は、彼女に関心無く反射的に受け答えをただけだった。ハマーンはゆっくりと前の席に座り、荷物を空いている椅子に置くと彼をじっと見て確信するのだった。

『間違いない……この男は……』

そう思った瞬間、ハマーンは意識する事無くこう声を掛けていた。

「あの……誰かと待ち合わせですか？」

「え？俺？いや……一人だけど……？それが何か？」

「よければ、貴方と少しお話したいのですが……」

「俺と？」

「ええ……。それとも、こんなおばさんと話するのは嫌かしら？」

その男は少し驚いた表情をしたが、その直後おどけてこう答えた。

「とんでもない！俺って年上から好かれる事が多かったし、あんたの様な美人とだったら大歓迎さ。

あつ、口が悪いのは勘弁してね。元々そんなに育ちが良い訳では無いんです。まあ普段は世間体もある

から丁寧に話すんだけど、自由になるとどうしても地がでてしまつて……俺より年上なのに……ゴメン

ね！」

「そんな……気にしないで下さい。むしろこちらが貴方と同一年のように思えて嬉しいですわ」

にこやかに笑って答えるハマーン。それを見ながら彼が楽しそうに答えた。

「でも、何で俺なんかと話そうと思ったの？ここは人通りも多いし、周りにはあんたに釣り合う男なん

て沢山いるだろうに……」

「ふふっ。そう言われると悪い気はしないわね。でもこう見えても一応子供がいるのよ」

「へえ、とてもそんな感じには見えないね。子供が出来るかと女性は良くも悪くも変化していくって俺の親父が言ってたけど……」

「それは仕方が無いわ。そうでもしなきゃ子供なんて育てられないし……。私だって家に帰れば掃除洗濯に料理と毎日が大変よ。手も荒れるので小まめにクリーム塗ってるし……」

「人間努力しないと墮落するっていうし、女性の美貌も同じなのかもね。でも、子供がいるのにこんな所で遊んでいいの？それとも旦那さんが面倒みてくれてるのかな？」

その言葉に、ハマーンは穏やかな表情で彼を見つめながら言った。

「子供はもう大きくなったので留守番位は出来るし、今日は生活物資の買い出しに来てただけで、遊んでた訳じゃないのよ」

「じゃあ、俺との時間は息抜きて事かな？」

「そういう事……。素敵な男が座ってたので、つつい声をかけてしまったって訳ね」

「ははっ。面と向かってそういう事言われると……。やっぱ照れるね。嬉しいけど……。でも旦那さんが嫉妬しちゃうよ」

その言葉にハマーンは一呼吸置いてから答えた。

「残念ながら結婚はしてないの……。というか、出来なかったわ……」

「あっ……。失礼……。その……亡くなったの……。かな？」

「ううん。生きてると思うわ。ただ、元々結婚出来る様な立場の人じゃ無かっただけ……よ」

「そりやおかしいよ。お互い好きだったんでしょ!？」

「ええ……そうね」

「だったら結婚しなきゃ……。だって、子供が可哀想じゃん。少なくとも俺はそう思うけどさ」
彼の声に、ハマーンは少し寂しそうな表情を浮かべながら答えた。

「貴方の言う通りね。でも、仮にその時はそれが一番正しい方法だったとしても、長い目で見ればそれは間違った選択だった。……という事もあるのが人生なの。判るかしら?」

「まあ……俺も色んな経験積んだから……そういう事も判るけど……でも……」

「私は好きな人との子供が出来て……その子と一緒に暮らす事が出来るだけで幸せだし、十分な養育費と生活費は貰ったから当面の心配はしなくて済むし……」

「お子さんは、父親の事とか聞いたりしてこない?」

「貴方も知ってると思うけど……近年色々戦争が多かったでしょ?そのせいか、出稼ぎや片親だけってのが珍しくないのよ。だから、まだその事に気付かないみたい。もちろん時期が来たら言おうと思ってるけど……ね」

「そうまで言うならこっちが言うべき事じゃ無いや。悪かった」

「ううん。謝る事なんて無いわ。それよりそっちこそどうなの?その顔立ちじゃ、女の子が寄って来るでしょ?結婚してるの?」

「残念ながらこの前振られたばかりなんだ」

「あら、勿体ない」

その言葉に、場が少し和んだ。

「何とか成り行きで付き合っただけで、一緒の船に乗ってたりしてただけで、付き合っていく内にお互いの許せない部分が出てきてき。でも、いつかきつと判り合えると思っただけで、すれ違いはどんどん大きくなるばかりで……結局その溝は埋められなかったね……」

少し寂しそうに答える彼に対して、ハマーンは優しく言った。

「私も似たような経験してるから気持ちには判るけど……。その彼女に未練は……？」

「無いよ。お互い納得した上で別れたからね。これ以上いたって、結局どっちも不幸になるってのが判ったからさ」

「そうなんだ。私はずっと彼の事を思い続けて、彼に振り回され続けた感じだったわ。もっとも、結果的には私の事を受け入れてくれたから、後悔は無いんだけど……ね」

「へえ……それは良かったじゃん。俺なんか人生後悔のしつ放しだよ。自分が良かれと思っただけでやった事が結果的に他人を不幸にしたり、理不尽だと思っただけでやらなきゃならなかったり……。子供の頃は人なんて、話し合えばきつと判ると思っただけだね。でも価値観や生まれが違う人間って、どうやっても埋まらない溝があるんだって事が最近になってやっと判ってきたよ」

「そうなんだ……。その話……おばさんとしては、ちょっと興味あるわ……。もっと話して欲しいな」

ハマーンは興味深げな目で彼を見つめると、一息付いてからおもむろに話し始めた。

「俺は戦争なんて、大人達が自分の私利私欲を満たす為に起こすものだと思っただけから、お互いが納得

のいくまで話し合えば、きっと良い方向へいくものだと思ってた。でも、実際は人間なんてそこまで賢くは無いし、例えば銃を撃って人を殺すのに全く罪悪感が無い人に、丸腰で崇高な平和論を唱えても駄目だって事が……ここ最近実感として判ったんだ。もちろん、その行為自体は立派な事だと思うけど、それによって殺されてしまった人がまた生き返る訳じゃ無いしね」

「……そうよね。だから結局平和を達成する為には大勢の反対勢力を根絶やしにしなければならなくなるという矛盾に行き着く訳だけど……」

「ああ、そうなんよ。これは俺の彼女だった人が昔言った言葉なんだけどね、『判らない人には何を言っても判らない』という言葉が最近よく判るんだ」

「じゃあ、貴方はこの前のシャアの反乱や、それ以前の戦いでは一体誰が正義だったと思う？」
ハマーンは少し意地悪な質問を試してみた。

「戦いに正義なんて無いさ。どっちも正しいと思うから戦う訳だし……」

「ふふっ。貴方の言う通りだわ。でもその歳でしっかりした考えを持つてるなんて立派よね」

「ありがと。こう見えても俺、苦労してるんだぜ。信じて貰えないかもしれないけど、ガンダムだって操縦した事があるんだからさっ！」

その言葉を待っていたかのように、ハマーンは彼にこう切り出した。

「そう言えば、まだ貴方の名前聞いてなかったわ。是非教えて」

「俺？俺はジュドー・アースタ。サイド1のシャングリラコロニーの生まれさ。お姉さんは？」

当時と変わらない少年のような表情で答えるジュドー。

「ふふっ、お姉さんだなんて気を遣ってくれてありがと。私はアルティシア……アルティシア・マイネ」
「へえ、いい名前だね」

屈託無く答えるジュードに、彼女は一瞬躊躇しながらも、思い切つてこう言うのだった。

「……でも、それはここでの名前なの。以前は別の名前だったし、実を言うとね、貴方とは以前何回も会つてるのよ」

「そっ、そうなの？こんな美人だったら忘れる訳は無いんだけどなあ……」

頭をかきながら、焦った顔で答えるジュードに、ハマーンは彼のテーブルを軽く叩いているもう一方の手に自分の手を重ね合わせた。その瞬間ジュードの表情が見る見る内に驚きの表情に変化した。

繁華街の、人々が賑やかに語り合う中で、別々の道を歩んできた二人が、今まさに交差しようとしていた。

*

*

*

過去の清算

「え！あ……あなた……えっ？」

「また会えるとはな。この縁、不思議とは思わんぞ。ジュード」

「あなた……ハマーン……なの……か？」

手を介して彼の中に流れ込んだ思念によって、ジュードは彼女がハマーン。カーンだという事に気付

いた。

「死んだと思ったか？まあ無理も無い。私もあの時点では死ぬつもりだったのさ。でもね、そんな時に限ってシャアが私を助けてくれた……。そして今ここにいる。……。そういう事だ」

「本当かよ……。本当にハマーンなのか！？」

「ああ。だが、お前の言うハマーン・カーンはあの戦いで戦死扱いになっている。あの時代は連邦もエウーゴやティターンズが派生したりと弱っていた時だったからな。私が消えて影響力が無くなったネオ・ジオンを穩便に武装解除さえ出来れば、私やミネバ様の消息などどうでも良かったのだろうさ。それに、シャアが早々に反乱を起こしてくれたお陰で、皆の目はそちらに移った事だろうし……」

ハマーンがそう呟いている間に、ジユドーの目から大粒の涙が後から後から出てきて、頬を伝ってテールに落ちた。呆気にとられる彼女にジユドーが、真剣な表情で言った。

「俺、あの時あんたを助けられなかった事がずっと心の中に残って離れなくて……。何度も夢の中にまで出てきてうなされて……」

「ふふっ、私をそこまで気にしてくれただとは……。思わなかったよ。会えば激しく拒絶ばかりされていたから、てつきり嫌われていたものと思っていたのだがな」

嬉しそうな表情で答えるハマーン。

「俺、今だから言うけど、俺は別にアーガマに乗りたかった訳でも、ガンダムを操縦したかった訳でも無かったんだ。最初はそりゃガンダムを盗んで売っ払えば金になるなんて思ってたけど……」

「……」

「でも、リイナがあんたらに連れて行かれてからは、そんな事はどうでも良くなったさ。俺はただリイナ……妹を取り戻したかっただけなのに、なんでみんな邪魔するのかわという事で頭がいっぱいだっし、地球に降りて妹が死んだと思っただ後はその仇を討とうという感じで戦っていた。だから、あんたの事に耳を傾ける気なんて全く起きなかったさ。まっ、子供だった俺にとっては、エウーゴもネオ・ジオンも関係無かったからね」

涙を拭きながらジュドーが答えた。

「ふふっ。お前らしいな」

ハマーンはそう言うと、席を立ち食べ物屋の露店に行き、二人分のファーストフードを買ってきた。

そしてその一つをジュドーに差し出しながら話した。

「私からの差し入れだ」

「えっ？ありがと……」

「そのお礼と言っては何だが、もう少しだけ私との話に付き合ってくれんか？ジュドー」

その言葉に、嬉しそうな顔で答えるジュドー。

「それはこっちもお願ひしたい位だよ。人生色々経験してみるとさ、もっとなあの時あんたと色々話をしておけば良かったと思う事が沢山あったんよ。本当に……」

「それは嬉しい事だな。もう『あんたの存在そのものが鬱陶しい』とは言わないのか？」

半分皮肉を込めてハマーンが言った。もちろんその顔は笑っているのだが……。その言葉に少し焦りながら答えるジュドー。

「俺……そんな事言った？はは……それって、いくら敵だったとは言え酷すぎる言葉なんだけど……」

「言われた方は結構覚えているものさ。私にあんな事を言ったのはお前とカミーユ位だったしな」

「じゃあ今だからこそ言える言葉という事で……言い過ぎでした」

ぺこりと頭を下げるジユド。

「お前がそんな事を言う様になるとはな……生き延びて、お前と再会出来て良かったと思うよ」

「俺もだよ。ハマーンさん。これでずつと心に引っかけた事がやつと無くなったからね」

「何ならそのゲームセンターの対戦マシーンで、私ともう一度戦ってみるかい？確か私が乗っていた
キュベレイもお前が乗っていたZ Zも使える筈だぞ」

「そりゃご免だね。こちとらもうMSには長い事乗ってないんだ。今戦ったらまず勝ち目は無いって」

「ほう。てつきりお前は戦場でその能力を生かすものだと思ってたがな」

「俺は元々人殺しはしたく無いからね。したい奴、MSに載りたい奴が勝手にすればいい。それに俺が
持つ能力ってヤツは戦争に使うモノじゃ無いと思ってるからさ」

「なら、今までどんな生き方をしてきたというのだ？」

「木星に行ってたよ」

「木星？」

「ああ、あんたの気持ちを本当の意味で理解するには実際に行ってみるのが一番だと思った。それだけ
さ」

「それだけで木星まで？」

「ああ、それだけだ」

その言葉にハマーンは一瞬啞然としたが、やがてクスクスと笑いながらこう言うのだった。

「本当に……お前という男は……。今程お前が私部下だったらと思つた事はないよ」

「……今なら構わないって言つたら……どうするのかな？ハマーンさん？」

ジユドーが意地悪な質問を浴びせた。それに対してハマーンは一瞬躊躇した後に答えた。

「私は……もう『死んだ』人間だよ。お前を選ぶ選択なんて出来る訳が無いさ。もつとも、あの頃お前が私の部下になつたとしても、私にはお前を使いこなせなかつただらうがな」

しばらくの間、沈黙な時間が流れた。やがてジユドーがハマーンの目を見て、こう言い放つた。

「じゃあ、そんな上下の関係じゃなくて、サイド6でたまたま出会つた男と女の関係でつてのはどうだ
い？」

その言葉に、ハマーンの顔が一瞬固まり、改まってジユドーを見ながら話した。

「お前……その言葉の意味が判つて言つてるのだらうな!？」

「当たり前さ。ガキの頃の俺ならともかく、今の俺は男女関係もそれなりに経験してるし、そうしなければ理解し会えない事もあるって判つたからね。もつとも、あんたにその気が無ければ仕方が無い話だ
けど……。正直彼女と別れてから下半身の方がご無沙汰だったんで、休暇貰つたついでに気の合いそ
うな女性でもないかと思つてたんだよね。寝ないで一晩中愛し合うとかを久しぶりにやってみたくてさ」
あつけらかんと言ひ放つジユドー。

「そこに私が声を掛けてきたという訳か。なら済まなかつたな。こんなおばさんが声を掛けてしまつて」

「何言ってるんだよ。昔は力づくでモノにしようとしたくせにさっ」

「ふふっ、今でもお前を欲しているとは限らんのだがな。お前は自分を買いかぶっているのではないのか？」

精一杯の反論をするハマーン。

「そうきたか。なら言わせて貰うけど、あんたがそういう性格なら、あの時俺を執拗に引き込もうとはしなかっただろうし、第一好きになった人の事をずっと忘れずに思い続けて、その人との子供を産もうなんて思わないだろう？それに、何で俺に声を掛けてきたんだい？俺だと思ったからなんだろう？あんたの心を満たしてくれる男だと思ったからなんじゃないのかい？」

ジューダーの勝ち誇ったような言い方に、ハマーンは苦虫をかみ潰したような表情を浮かべたが、やがて頬を少し赤らめてこう言うのだった。

「俗物だな……お前も……私も……」

「でもさ。ハマーンさん。心から沸き出てくる想いを否定する事こそ愚かな事は無いって。俺は、今だからこそあんたと男女の関係になってみたいと思うんだ……どう？」

ジューダーの言葉に、ハマーンは即答出来ず、彼の目を見つめた。少年の頃よりも遙かに逞しく力強い目になっていた。やがてハマーンは降参したという様な感じで言った。

「口だけは一人前になったものだな」

「体もあの頃よりは立派になったと思うんだけどなあ……。今なら充分あんたを満足させてあげられると思うぜ」

「あつ、あの時はそんな理由で近付いた訳ではないぞ！」

「じゃあ今は？今なら……OKでいいんだね？」

「……………」

恥ずかしそうに視線を逸らすハマーン。ジュードはスツと立ち上がり、ハマーンの手を取った。

「じゃあ、決まりだ。行きましようか。今日の俺のお姫様」

「嬉しい事を言ってくれる。でも、私は経験豊かな子持ちのお姫様だぞ」

「はい。充分でございます。その経験をどうか私めに存分にご披露下さいませ」

わざと戯けてみせるジュード。それは、それまでの数々の経験が成せる事なのだろう。やがて二人は

近くにあるホテルへと歩き始めたが、その最中にハマーンが思い出したように言った。

「言っておくが、子供に夕食を作らなければならないから、泊まる事までは出来ないからな」

「判ってるって。でも色々制限されて大変だね」

「そんな苦勞も楽しいものだ。お前も人の親になったら判るよ」

「ふん。そんなもんかね」

そんな話をしながら、ホテル（もちろんそれは男女が愛し合う為のホテルである）のロビーで鍵を貰って部屋へと向かった。

*

*

*

前哨戦

しばらくした頃、ホテルのバスラブで抱き合いながらお湯に浸かっている二人の姿があった。端から見れば座位でのセックスをしてるようにも見えるのだが、まだ二人はその前段階をじっくりと楽しんでいる最中だった。何度も繰り返される濃厚なキス、そしてジュードのハマーンの胸への愛撫が絶え間なく繰り返されていた。やがてジュードがハマーンの首筋を舐め、それが耳の裏まで達しようとした時、彼がそっと囁いた。

「正直、俺……あんたとこんな関係になるなんて思わなかったな」

その言葉に、体を熱く火照らしたハマーンが答えた。

「私だって、お前がこんなに良い男になってるとは思わなかったよ」

「強がり言っちゃって。裸になって気付いたけど、乳首とラビアにリング状のピアスが付いてるし、下の毛は綺麗に剃ってあるし、おまけにキスと愛撫だけでメロメロになるし……あのネオ・ジオン時代の女王様のように振る舞っていたのは何だったんだと思うよ。本当に」

「これもまた私なんだよ。ジュード」

顔を紅く染めながら、ハマーンは恥ずかしそうに答えた。

「ハマーンさんって、誰かに調教されてたの？」

「ふふっ、お前はストレートに聞いてくるのだな」

「だって興味あるじゃん。一体誰がこんな体にしたのかってさ」

「だったら私に命令してみるがいい。私の事をハマーンと呼び捨てにして……。私は強い男に命令され

るのがこの上なく快感なのだよ」

「ホント、あんたって……実は相当の変態だったんだな」

「嫌いか？」

ハマーンの寂しそうな言葉に、ジュードは彼女の胸に吸い付き、右手で下半身の大事な部分をまさぐりながら言い放った。

「強い女のこんな姿を拝めるなんて、最高だね」

「あんっ、ジュード……もつと優しく……」

「そう思うなら、マゾらしくお願いしてみればいいだろう？」

「判った……。いえ……判りました。ジュード」

「こういう時は『ジュード様』だろう？ハマーン？」

「はい。ジュード……様、どうかこの私を優しく愛して下さいませ。お願いします」

快楽と年下からの屈辱？で恥ずかしそうな表情を浮かべながら言い放つハマーン。

「じゃあこの質問に答えるのと交換条件という事で……あんたはいつからこんな感じの女になったんだい？」

「私が……ですか？」

「そうだ。ネオ・ジオンを率いてからなのか？それとももつと前からなのかという事さ」

「じ……十四歳の頃から性の調教を受けておりました」

顔を真っ赤にして答えるハマーンに、ジュードは驚きの表情を浮かべた。そして、ハマーンのは自分

が心を預けた人と主従関係の契約を結んだ事、緊縛、浣腸、露出、前後の穴へのバイブ責め等の調教の数々、そして、ソフトなものからハードなセックスの営みまですべてを語って聞かせた。その余りにも想像を超えた内容の数々に、しばらくの間言葉を無くすジュードー。

「大丈夫か？ジュードー」

通常の話し方に戻ったハマーンが心配そうに言った。

「ああ……ちよっとショックな内容だったけど……もう大丈夫。でも、何でそんなに快樂を求めてエスカレートしていったんだ？そんなんじや、精神が壊れてもおかしくないだろうに」

「そうだな……組織を率いる重圧、そして私が行動するが故に死んでいった者達の声から逃れたかったから……としか言えんな」

「そこまでして、何でネオ・ジオンなんか率いなきやならなかったんだよ！」

ジュードーの目にうっすらと涙が浮かんでいた。

「私の為泣いてくれるのか？ジュードー！」

「当たり前だろ！運良く生き残ったからいいけど、もし俺との戦闘で死んでたら、悲しすぎるじゃないか！」

そう言っ唇を重ねるジュードー。更に話を続けた。

「今更だけど、最後の戦いであんた……死ぬつもりだったんだろ？」

その問いかけに、一瞬間を置いて答えるハマーン。

「そうさ。あの時点でもう自分のやるべき事はやり尽くしたと思ったし、後は私が残した道をあの人が

踏み台にして進んでいってくれればいいと思ったからな。まさか、最後の最後に助けに来るとは思っ
無かったのだが……な」

「そんなに、あんたが想う人ってのは、そんなに大事な人なのか？」

「ああ、私の人生全てをかけてもいい位大事な人だ。彼が私に『今まで済まなかった。後は任せてくれ』
と言ってくれたからこそ、私は今ここに生きているとも言えるのだよ。そして、彼の足かせになるから
こそ私は身を引き、こうやってひっそりと暮らしているのさ。今は彼の子を一人前に育て上げる事が、
私の生き甲斐だよ」

はつきりと言いつ切るハマーンに対して、ジユドーはこう答えた。

「俺が言うのも何だけれど、あんたにそこまで決心させる男に……嫉妬しちゃうな……。ちくしょう、
なんで今頃になってこんな気持ちが始まってきたんだよ。今あんたがとっても愛しく思えてくるよ」
二人の目が合い、再びキスをする二人。

「お前にそう言って貰えると、例え同情からだとしても嬉しいものだな。胸がドキドキしてるよ」
そう言うと、ハマーンはジユドーの手をそっと自分の胸に当てた。

「判るか？」

「ああ、鼓動の高鳴りと共に、あんたの心の波長が伝わってくるよ。とっても優しく温かい波長が伝わ
てくる。戦っていた時はどす黒くて邪悪な面ばかり強調されていたけど、それは無理に醸し出していた
だけで、本当は優しく純粋な女性だったんだね。ガキの頃の俺にはそこまで判らなかつたよ」

「それもまた巡り合わせというものだよ。私が彼……シヤアの側と一緒に戦う事が出来なかつたのも、

お前と出会った時にお前が若くて私を理解出来なかったのも、その時の努力ではどうにもならない事だ」

「ちよつと待って。シヤアって……あのシヤアの事か？」

「そう。私の恋人でありご主人様は、赤い彗星のシヤア・アズナブルだ。私の子供は彼との子だよ」

その言葉に、更に驚くジュード。

「ホントあんたって……色々な意味で凄い人なんだな。俺はこんな人に誘われていたのかと驚いちやうよ」

「ふふっ、全て終わった事だよ。私はもう……あの息苦しくて辛い世界には戻る気は無い。なぜなら私はもう死んでいるのだからな。いずれにしる私の指導者としての役目は終わったのさ……」

「じゃあ、今俺を誘っているのは何故だい？」

「誘ったのはお前の方だろう？ジュード」

「……そうだったね。彼女と別れてから初めての休暇だったので、人肌が恋しくて盛っていたのかもね」

「その年頃では無理は無いさ。まあ、今から私が教え込まれたテクニクで何度も昇天させてやるから、覚悟するのだぞ。ジュード」

「ああ、こちらこそよろしくな。ハマーン」

そう言い合うと、二人はバスタブを出て、脇の広い洗い場へと移動した。そのホテルは、普通のセックス行為の他に、SM行為にも対応出来るように風呂はプレイが出来る様に広く設計しており、寝室もまた蟻や排泄物が飛び散っても簡単に掃除出来る仕様になっていた。またベッドの脇にはプレイに使用する為の道具を注文するディスプレイが設置されており、そこでオーダーすれば即座に部屋の入り口脇

の物入れに届く仕組みになっていた。

二人はしばらく抱き合ったままディープキスをしていたが、やがてハマーンの方から優しい口調で囁いた。

「ジュードー。お前は私とどんな事をして過ごしたいの？ベッドで好きなだけ愛し合ってもいいし、ハードなSMプレイをしてもいいぞ。全ての選択権をお前に預けるよ」

「そうだな。じゃあ、まずは俺とあんたは歳が離れているけど、今はただの男と女の関係だ。俺は今からあんたをハマーンと呼ぶから、あんた……いや、ハマーンも俺の事を、年下扱いしないで接して欲しい」

その頼みに、ハマーンはジュードーの胸に頬を付けながらこう答えた。

「判ったわ。ジュードー。主従関係のような口調はそういうプレイをした時だけにするわ。今からお別れする瞬間まで、私とジュードーは恋人の関係でいいわね？」

「ああ、数時間の間だけの付き合いになるけど……俺、精一杯愛しちゃうからね」

「ええ、私も……さつきジュードーにあそこを触られてから、ずっと体が疼きっぱなしなのよ」

「淫乱なんだね」

「ふふっ、ペニスをこんなに大きくしている人が言う言葉じゃないわよ」

ハマーンの言う通り、ジュードーのペニスは今にもはち切れんばかりに大きく反り返っていた。二人はバスタブから出て、洗い場で立ちながら濃厚なキスを何度も交わした。やがてハマーンはジュードーの胸から徐々に下半身へと下を這わせ、やがてしゃがみ込むとジュードーのペニスを優しく口に含んだ。

「うっ」

一瞬ビクツつと反応するジュード。バスルームにハマーンがペニスをしゃぶる音が淫らな感じで響き渡った。最初は気持ち良い感じでされるがままにしていたジュードだったが、やがて気持ち良すぎて徐々に腰を引いてしまった。それを見てハマーンが言った。

「どうしたの？こんな事、前の彼女ともやってたんでしょ？」

「確かにやってたけど、こういう事が余り好きじゃない娘でさ。そういうのも別れる原因の一つだったんだ」

「そうなの？こんな立派なペニスを啜えたくないなんて……」

「そう言いながら、再びペニスにしゃぶり付くハマーン。」

「ハマーン。その……俺の気に入ってくれるのは嬉しいけど、その……もう少し手加減して欲しいんだけど……このままだと……あ……」

「ふふっ、貴方には色々と作戦を邪魔されたから、お返ししてるのよ」

とつても幸せな表情で言い返すハマーン。ジュードはその表情に毒気を抜かれたのか、その場に座り込んだが、彼女のフェラはその後も執拗に続いた。たまらずジュードは足をM字にしたまま体を後ろに倒して寝転んだ。そして両手は行為を続けるハマーンの頭を優しくではあるが掴んだ。

「あっ……ああっ……」

強弱を付けてペニスを吸われたかと思うと、カリの部分を丹念に舐め回したり、裏筋を舐めたりとマンネリにならないように変化を付けてフェラ行為を行うハマーン。やがて、ジュードの体がこわばり、

手に自然と力が入ってくるのが判った。どうやら射精が近いらしい。彼が、弱々しい声で言い放った。

「ハマーン……俺……もう……」

「いいわよ、全部口で受け止めてあげるわ」

やがて、ジュドーのうめき声にも似た声がバスルームに響き渡ると、彼の体が硬直してブルブルと震えだした。そしてその直後、彼のペニスが一瞬大きくなったかと思うと、ハマーンの口の中へ勢いよくミルクが飛び出してきた。彼女はそれを全て口で受け止めると、ペニスからミルクが出尽くしたのを見計らって顔を上げ、ジュドーと目を合わせた後に、それをゴクリと飲み込んだ。

「ごちそうさま。ずいぶんと出してなかったみたいね。とつても濃かったわよ」

「ははは……」

「あ……」

そう言った後に再びペニスを啜えて尿道に残ったミルクを吸い出して再度飲み込んだ。そして近くの水道で軽く口をゆすいだ後に彼の脇に寄り添ってこう言った。

「大丈夫？」

それに対して、息を切らしながらもジュドーは片目をつむりながら答えた。

「平気平気！久しぶりのフェラだったのと、余りにも上手かったからちよつと感じ過ぎちゃってさ。五分だけ休ませてくれる？そうしたら大丈夫だから……」

その言葉に、ハマーンは無言で彼の頭を座っている膝の上に乗せた。自然と目と目が合う二人。ジュドーがポツリと呟いた。

「髪を下ろした姿や、前の髪型も良いけど、今の髪型も似合ってるね」

「ありがとう。やっぱりあの髪型でいると色々……ね。でも、あの髪型でいるとシャアの興奮度が半端じゃなかったのよ」

「どういう事？」

「妹さんの髪型に似てるからだって。彼は私を抱きながらも、彼の妹さん……セイラのイメージを連想して事に及んでいた位なのよ。フィニッシュの時に『アルテイシア』って……あ、それがセイラ姉さんの本名なんだけど……を低く叫んでミルクを出した事も一度や二度じゃないのよ」

「酷いな。それは……」

「子供の頃に性的な関係を持ってしまったんだって……。何というか、あの人にとっては特別な人らしいの」

少し寂しそうな表情をするハマーン。そんな彼女にジュードは優しく語りかけた。

「少なくとも、俺はそんな事しないぜ。それにハマーン。今あんたのパートナーは俺だろ？なら俺の事だけを考えて欲しいな」

「ええ、そうね。無粋な男の名前なんか出してご免なさいね」

「いいって。それよりもほら、下半身がもう……」

彼のペニスが再び反り返って大きくなってきていた。

「ふふっ、元気ね……これからたっぷり搾り取ってあげるわよ」

そう言い合うと、ジュードとハマーンはその場で抱き合い、濃厚なキスをしながらお互いの体をまさ

ぐりあって、性感を高め合った。次のプレイに向けて……。

*

*

*

Mなハマーン

さっきの行為の後、ジュドーはハマーンをバスタブの中で浸かっているように頼むと、ベッド脇にあるディスプレイ越しに何か注文をした。そして即座に届けられた品物を用いて、ハマーンにこれからやりたい事を説明した。もちろんジュドーに行為の全てを託している彼女にとっては、拒否する事は無かったが、少し恥ずかしそうな表情を浮かべた事も確かだった。

しばらくした頃、バスルームの洗い場には、足を折り曲げて太ももの部分辺りで動けないように紐で何重にも縛られ、丁度M字の状態で座っているハマーンと、二つのバイブが付いた革製の下着、そしてイチジク型の浣腸一箱を持ったジュドーが彼女の前に座りながら何やら話し合っていた。そして、ジュドーがそれを締めるような感じで言った。

「……じゃあ、俺が言った事を自分の立場を理解した上で言っておくかな」

その言葉に、一種躊躇するハマーンだったが、ジュドーにバイブの先端で頬を軽く叩かれると、屈辱に耐えるような表情をしながら、顔を真っ赤にして言った。

「はい……。私、ジュドーの……」

「ジュードー『様』だろう？」

「失礼しました。ジュードー様の忠実なる奴隷ハマーンは、今から私の火照る体を使ってご主人様に満足して頂ける様に、精一杯尽くさせて頂きます」

「はい。良く出来ました」

その言葉を聞いただけで、ジュードーのペニスは血管が浮き出る位ギンギンに反り返っていた。戦争中は『私に従え！』等の命令口調で言い放っていた彼女が、まさかこんな面を併せ持つ女性だったとは思わなかったというのが、彼の興奮に拍車をかけていた。このプレイをジュードーがしたいと思ったのは、先程ハマーンが自分の性生活について告白した際、その行為の激しさに驚く自分とは別に、余りの口調の変わり様を見て『もっとこの人の堕ちる姿が見たい』と思ったからであった。ジュードーは恥ずかしそうに視線を逸らしているハマーンに顔を近付けると、手でクイツと顔を上げさせて濃厚なキスを交わし、その後舌と舌だけを絡み合わせて彼女の表情を嬉しそうに眺めていた。お互いの唾液が舌先からツーツと垂れた。

「本当に従順になるんだね。軍服を着た強そうな姿ばかり思い出すから、驚いたやら興奮するやらでもう……」

「ジュードー様は、どちらの私が好みですか？」

「どちらもハマーンなんだろう？」

「はい。どちらの姿も私そのものです」

「俺はどつらのハマーンも大好きだよ。本当は淫乱で変態なのに、それに堕ちまいと顔を赤くして激し

く葛藤している今の姿なんて最高だね」

「あつ……ジュード様が満足して下さっている様で、ハマーンはとても嬉しいです。でも、こんな姿をジュード様に見られるなんてとっても恥ずかしい……」

羞恥心から涙目になって、手で顔を隠そうとするハマーン。それを手に持っていたバイブ付きの下着を思わず床に落としながら制止するジュード。

「手で隠すなんて勿体ないじゃないか。もっと、俺にその姿を焼き付かせてくれよ」

「こんな私で……いいのですか？ジュード様」

「ああ、でもこんな姿……今まで何人に見せた事があるんだい？」

彼自身過去の関係した男に興味は無いのだが、それをあえてハマーンに言わせる事が重要なのだった。

「はい。私をこの様な体にしたシヤアと、アムロ……の二人です」

「シヤアは判るけどアムロって……この前シヤアと戦ったアムロ・レイの事かい？」

「はい。私はその二人にだけこの淫乱な雌犬の様な姿を晒しています」

「こりや驚いたね。ハマーンともあろうお人が、敵側のアムロとも関係を持っていたなんてね。あんた、本当に淫乱な女なんだな」

「はい。そうです。ハマーンは……人を俗物と蔑みながら、その実自分が変態で淫乱な俗物だという事を隠しながら生きてきた最低の雌犬です」

そう言うと、ハマーンはアムロと肉体関係を持った経緯を赤裸々に話し始めた。（注…「背徳な戯れ」参照）それを聞いて、ジュードは呆れたように言い放った。

「まあ、アムロと知らずに助けてもらったのはいいとして、いくらストレスが溜まっていたからと言って、公園を全裸で歩くかい？それも縄がけして浣腸までしてさっ！」

「ああ……恥ずかしい……言わないで……」

「でも、やったんだろう？浣腸して全裸散歩をさっ」

「は……い」

「相当な変態だね」

「はい。恥ずかしくて、苦しくて……でもそれ以上に感じてしまつて……アムロに排泄する所を見られた時は、このまま死んでもいいと思う位の快感でした」

「恥ずかしさは相変わらずだが、それをうっとりした目で話すハマーンにジュードーは彼女をとても愛しく思えるのだった。そして、こんな言葉を発した。

「なら、安心したよ」

「ど……どういう事でしょうか？」

「俺がホテルのフロントから取り寄せた物つて……判るよね？言ってみて」

「はい。アナリストツパーと極太バイブが二つ付いている下着と、私の中から排泄物をひねり出す為の浣腸です」

「ご名答。実はシヤアに色々調教されたって話を聞いた時から、あんたの悶え苦しむ表情を見たいなと思って注文したんだけど……正直こんな事頼んじゃ済まないかなあ……なんて思ってたんだ。でも、そんなハードな事が出来たんなら……大丈夫だよな？」

「正直流腸自体はここ数年ご無沙汰なので、長く我慢する事は出来ないとは思いますが、私が悶え苦しみながらも快樂の波に浸っている姿を見て、ジュード様が喜んで下さるのでしたら……」

「素直だねえ……。でも恥ずかしいのかい？」

「はい。このまま性奴隷として暮らすのであればそれも無くなるのでしようが、一般社会で普通に暮らしている時間が長い分、どうしても……」

「そう言えば子供は男なの？女なの？」

「男です。最近シヤアの面影が出てきて、時々ドキツとする事があります」

「ふくん。息子さんは母親であるあんたがこんな淫乱な女だなんて知ってるのかな？」

「それは知らないと思います。シヤアとの調教時の映像や写真はデータ変換した上に暗号化してアクションの中に置いてきましたし、家にある道具類は子供が手に触れないように厳重にロックしてます」

「なら、ここで今のあんたの姿を画像に納めて、息子さんに見せたら……どうなるかな」

「そ……それは……」

「淫乱で変態な二人から生まれている子供だから、やっぱりその血が騒いで関係を持ってしまおうのかな？」

「そんな事は……あの子にはそういう淫乱な事や戦争とは無縁でいて欲しいのです。それだけはどうかお許し下さい」

「まあ、俺もそこまで鬼畜じゃないんで、そこまでやるつもりは無いんだけど、子供とセックスしてしまつた時の事を考えると興奮するんじゃない？ハマーン？」

「えっ!？」

その瞬間、ハマーンは子供が性道具を発見して自分を押し倒して行為に及ぶ光景を想像した。その瞬間、彼女の心の中に淫らなドロツとしたものが流れるのを感じ、呼吸が乱れた。それを見てジュドーが言い放った。

「自分の子供とセックスする事を想像して感じたのかい？」

「いえ……そんな事は……」

「そりゃ嘘だろう?その証拠に……」

ジュドーはその直後、ハマーンの下半身に手を伸ばした。そして中指と薬指を彼女の穴の中へ入れ、クリトリスやヴァギナ全体をこねくり回した。

「ここはもうグチョグチョになってるじゃん？」

「ああっ……うっ……気持ちいいっ……!!」

快楽の波に、思わずジュドーにしがみ付いてしまうハマーン。

「正直に言ってみろ?興奮したんだろう？」

「あっ……はい……息子と背徳なセックスして感じている自分を想像して興奮してしまいました」

「うん。正直でいいね」

ジュドーはそう言うと、下半身から手をハマーンの口元に持ってきた。それをとても愛おしそうに舐めるハマーン。

「自分の愛液は美味しいかい?ハマーン」

「はい。とつても……美味しいです」

「俺がこれから何をするか判るかい？」

「勿論です。ジュドー様」

「じゃ、言ってみてくれないかな」

ニヤニヤしながら言い放つジュドー。その目を見ながら、一瞬躊躇した後にハマーンは意を決して言った。

「私、ハマーンは、これからジュドー様に浣腸をして頂き、後ろの穴には栓を、前の穴にはバイブを入れて苦痛に耐える姿をお見せ致します。これからどうか私の嫌らしい尻穴にその薬を入れて、苦しむ私の姿をご覧になって楽しんで下さいませ」

「良く出来たね。本当にあんたを調教したシヤアっていう人は凄いな。じゃ……」

ジュドーはそう言うと、ハマーンを優しく後ろに倒した。彼女の足は縄で縛られている為、文字通りM字に下半身が開き、彼女の恥ずかしい部分がジュドーに丸見えになった。恥ずかしさの余り、思わず両手で顔を隠すハマーン。

「へえ……使い込んでいる割には綺麗なアソコだね。後ろの穴も脱肛してないし……」

「はい。シヤアが拡張とか無理なプレイはしませんでしたので……」

「ハードな事をする割にはそういう所には気を使ってたんだ。良いご主人様なんだね」

「はい。……でも、今のご主人様はジュドー様ですわ」

「あつ、そうだったね。じゃあ今から浣腸するけど、ハマーンは何個まで我慢出来るかな？」

ジュードーはそう言うと、ハマーンにイチジク型の浣腸器を見せた。

「この容器でしたら……今は三個位までなら……」

「五個だね。判った」

「えっ！そ……そんなに入れたら……」

ジュードーはそう答えるハマーンの越を浮かせて、そこに自分の膝を置き、彼女の下半身がやや上向きになるような体制にした。

「する前にちよつと味見を……」

ハマーンのヴァギナに舌を這わせるジュードー。そうすると、バスタブ内にハマーンの下がり声が響き渡った。彼はしばらくそうした後、彼女の愛液を手ですくってアヌスに塗りつけて、浣腸を一個、また一個と注入していった。声にならない声を発して、うつろな表情で天井を見ているハマーン。

「さあ、全部入ったよ。やれば出来るじゃないか」

「あ……ありがとうございます。ジュードー様。お腹が痛くならない内にストップパーを……」

「そうだね。ちよつと待って。このままだと入らないから」

ジュードーは再びハマーンのヴァギナから溢れ出ている愛液をすくってシリコン製のアナラストッパーとパイプに入念に擦り付けた。そして無理をせずにつくつくりと二つをハマーンの中に埋没させた。

「ああくっ、あっ！あっ！あんっ！……」

声にならない声をあげてよがるハマーン。そしてジュードーは次に彼女へ革製の下着を装着させた訳だが、これは今回の様に足を縛られていても身に付ける事が出来るように、左右の腰の部分がベルト状に

なっている仕様だった。これは、ぎっちり絞めれば、バイブ等のずり落ちを防止出来た。それが終わると状態を起こし足を開き気味にして座らせると、手首を後ろで縛った。

「はい完成。どう？調子は？」

「まだ……大丈夫です。ただ、久しぶりにバイブを入れたので圧迫感が……はあ……」

「バイブの電源はまだ入れてないけど、苦しくなった時に入れてあげるから、それまで我慢してね」

「はい。あ……ありがとうございます」

「じゃあ、この状態のまま、口だけで僕のペニスからミルクを出す事が出来たら、排泄を許可するとう事で……。間違っても歯で噛まないでくれよ」

「判りました。こういう事は何度も経験していますので……心得ております」

「ホント、あんたって筋金入りの変態だよね。はい、ご褒美」

ジュードーはそう言いながら立ち上がると、彼女の顔面にペニスが来るように反り上がったペニスを手で握り前を向くようにした。すると、ハマーンは快楽でトロンとした目をしながら、亀頭とカリの部分を舐め回し始めた。そのテクニクに思わずジュードーは声を出してしまった。

「うっ……口だけでこれかよ。一回出してなきや、あぶない所だったね」

そう思ったのもつかの間で、やがて彼女はペニスから口を離すと、苦悶の表情を浮かべて頭を下げた。どうやら浣腸の効果が出てきたらしかった。

「うっ……ううっ……」

「大丈夫かい？」

「はい、まだ何とか……」

そう答えると、苦しみながらも何とかジュードを昇天させようと、必死にペニスをしゃぶろうとするハマーン。その姿に、ジュードは今までに無く興奮するのだった。彼は、ルーとはそういう行為をした事が無く、一度頼んで激しく拒否された為、実は一度やってみたいプレイでもあった。やがてハマーンは、ペニスをしゃぶる時間よりも、浣腸の激痛に耐える時間の方が長くなってきた。

「ああっ……痛い……お腹が……。出したい……ジュード様……出したいです」

「何を出したいんだい？言ってみてよ」

「あ……ンコ……を……」

「良く聞こえないよ。ハマーン」

「ウンコ……排泄物を出させて下さい。もう……限界です。お願い……出させて……下さいませ」

「まだ俺は出そうも無いからなあ……とりあえずこれで痛みを紛らわして頑張ってね」

ジュードは彼女の下半身から出ているバイブのリモコンを操作した。その瞬間、ハマーンの体がビクツツと反応し、快楽で反り返りそうになった。あわてて彼女を支えるジュード！。

「危ないなあ……もう」

「ありがとうございます……ごさいます。お陰で痛みが……はあ……大分紛れて……またジュード様のペニスをしゃぶる事が出来そうです」

「ああ……頼むよ。ハマーン」

そう言って再びプレイが再開された訳だが、痛みと快楽の中で必死に我慢しながらのフェラだけに、

なかなかハマーンの口だけではジュードーはミルクが出そうも無かった。かと言って、ハマーンが昇天してしまつてはプレイが終わつてしまうので、ジュードーは自分のペニスをしごいて、彼女に協力してあげるのだった。その行為を知つて、申し訳なさそうに見上げるハマーンに対して、ジュードーは優しく言つた。

「気にしないでね。あんたのそんな姿を見て、俺も我慢出来なくなつただけだから……もう少しで出るから、それまでは……我慢してくれよ」

「はい。ああっ……好き……ううっ……」

排泄感による痛みの山が（下痢の時に経験するのと同じ感覚）来たらしく、ハマーンは拘束されている体を痙攣させながら必死に耐えていた。やがてそれが小康状態になると、また必死にジュードーのペニスをシャブリ始めた。その行為がジュードーにはとても健気に見えて更に興奮した。そして、彼女がそんな状態をあと二度程経験して、肉体的にも限界を迎えそうな頃、ジュードーの快楽も絶頂を迎えようとしていた。

「あ……もう少しで……出るよ……」

「はい」

その言葉に、ハマーンのエラも更に激しくなった。

「その辺……そう。そこを舐めていて……。そう……あっ……あっ……あっ……あっ……」

ジュードーのペニスを擦る手が激しくなり、やがて絶頂を迎えて体がブルブルと痙攣し始めた。

「出るよ！ハマーン！」

「はい。口に……出して下さい」

目をつむって大きく口を開けるハマーンに、ジュードのペニスの先から勢いよくミルクが発射された。何回かドクドクと出たミルクを口で受け取ると、ハマーンはペニスの先端から垂れそうなミルクまで丁寧に舐めて、最後に尿道から残りを吸い出すような感じで口に含んだ。射精後でペニスがかくすぐったくなっていたジュードは思わず腰が引けてしまうのだった。

「はあ……はあ……。ありがと。ハマーン。じゃあ、約束通り排泄させてあげるね」

そう言ったジュードに、ハマーンはミルクを飲み込んだ後で意外な事を言うのだった。

「お願いです。その前に……私を……昇天させて下さい」

「え？でも出したいんじゃないのかい？」

「苦しくて……もう我慢できないくらい苦しいのですが、それと同じ位この苦しきの中で絶頂を迎えたのです。お願いします。バイブを最強にして下さいませ」

「ああ、判った。存分にいきな」

手の縄を解き、バイブを最強にするジュード。そうすると、ハマーンの体が、まるで糸が切れた人形のように激しく動き出した。左手はクリトリスへ、そして右手はバイブを更に押し込んで快楽を得ようとまさぐるハマーン。そんな姿をみていたジュードだったが、射精感が収まると、今度は排尿感が沸いてきた。

「なあ……ハマーン……」

「はい……な……なんででしょうか？」

「あんたってオシッコかけても大丈夫かな？ミルクがでたら今度はオシッコがでそうでさ……ダメかい？」

申し訳なさそうに言うジュードーに対して、ハマーンは快楽の波を必死に堪えながらこう答えた。

「大丈夫です……。そういうプレイも……。何度となく……。経験してますから……。宜しければ人間便器として……。口で……。受け止めます」

「いいのかい？」

「ええ、それも調教済ですから……」

「じゃ、ここで遠慮するのも失礼なので……出すよ」

ジュードーはそう言うと、ハマーンの口めがけてオシッコをし始めた。最初はチョロチョロとだったが、大分溜まっていたらしく、一度出始めたオシッコは、ハマーンが必死で飲み込む量を遙かにオーバーして口から溢れ出した。彼女の口から溢れ出たオシッコは喉を伝って胸へと垂れた。それが下半身へと到達しようとした時、ハマーンはそれを自分の体に塗りたくった。その行為に、ジュードーの心の中に再び興奮の火が付くのだった。オシッコが終わり、ハマーンが再び快楽の絶頂を目指したその時、ジュードーは再び自分のペニスを激しく擦り始めた。普段体験した事が無い異様な光景に、若い彼の下半身が反応したとしても、それは仕方が無い事だろう。

そうしていると、やがてハマーンも絶頂を迎えた。

「あっ……いい……イク……イクウウウウ!!!」

縛られている足を縄が食い込むまで伸ばし、全身を弓状にしながら痙攣するハマーン。それは結構長

い時間続いた様に思われるが、その後は全身の力が抜けてその場へ倒れ込んでしまった。オナニーを中断して慌てて近寄るジュード。

「大丈夫かい？ハマーン」

「はい。大丈夫です。ジュード様のおシッコを飲んで、全身に塗りたくっていたら、快楽が更に上がって……ずっと忘れていた淫乱な血が全身を駆け巡ってしまいました。今、とっても幸せです」

ジュードに抱き付き、ディープキスをするハマーン。その口には、さっきジュードが出したおシッコとミルクの味が残っていたのだが、興奮したジュードにはそれさえも新鮮に感じた。

『これが俺の……か……』

ジュードがそう思っていると、ハマーンが再び声を発した。

「そろそろ浣腸の痛みが戻ってきます。お願いですから排泄の許可を……」

「ああ、よく頑張ったね。ちよつと待って」

ジュードはそう答えると、まず両足の縄を解き、その後皮の下着を脱がせた。次に愛液でドロドロになったバイブを引き抜いた。

「ああつ……」

そのよがり声に、ジュードの下半身は、再び大きくなるのだった。そして最後にアナルストッパーをゆっくりと引き抜いた。

「いいよ。もう出しても……」

その時、ハマーンは排泄感を必死に堪えながらこう言うのだった。

「ジュードー様……私の排泄する瞬間……見たいですか？」

「えっ」

一瞬返答に詰まるジュードーだったが、一瞬間を置いてこう答えた。

「そりゃあ見る機会はないし、興奮するから見たいとは思うけど……」

「では、私、ハマーンのお尻から排泄物が出る瞬間を、どうか見て下さいませ」

そう答えると、ハマーンは膝立ちでうつ伏せになり、お尻を大きく突き出すような格好になった。その姿を見て、ジュードーは再び激しくペニスを擦り始めた。

「ああ……出る……出ちゃう……」

オシッコと、オナラが出た後、お尻から茶色い液体が飛んだ。

「ああっ……恥ずかしい。出る瞬間を……ジュードー様に見られてる……」

再び右手で激しくヴァギナをまさぐるハマーン。やがて、固形物が少し出たかと思うと、次の瞬間大きな固まりがハマーンのアヌスから大きな音と共に飛び出してきた。排泄物の臭いがバスルームの中に漂いそれがまたハマーンの変態性に火を付けたのと、ジュードーの興奮度を増加させた。何度となくアヌスから排泄物を吹き出すハマーンに対して、ジュードーは弱々しい声でこう言った。

「ハマーン。あんたの排泄行為を見ていたら、また……」

「では、今度は私の背中に……私ももう少しで……」

「排泄しながら感じてたのかい？ ホント変態だねあんたは。一緒にイクかい？」

「はい……ああっ……!!」

「出すよ！」

「私ももう……イクウウウウ！」

ジュードーがハマーンの背中に三度目のミルクを放出させると、それを見計らった様にハマーンも絶頂感を迎えた。ジュードーは行為が終わるとその場に座り込み、ハマーンはその体制のまま、時折排泄物を出しながらも、快楽の余韻に浸っていた。やがてハマーンの排泄が完全に終わると、二人はキスを交わした後、排泄物を処理して体を洗い、再びバスタブへと浸かり、お互いにどちらからともなく激しく抱き合い、しばらくの間デープキスを交わしていた。

*

*

*

インターバル

「大丈夫かい？ハマーン」

バスタブの中で、彼女の胸を触りながらジュードーが心配そうに言った。

「心配してくれてありがとう。まだお腹がシクシクしてるけど、直に収まるから……」

「あの……その……アステロイドベルトでもこんな感じの事を……？」

「そうね。こんなもんじゃ無くてもっとハードだったわ。お腹が膨らむ位入れられて、そのまま一時間放置とか、全身縄掛けされてお尻を上に向けての排泄とか……」

「それって、体に掛かっちゃうじゃん」

「それが目的なんだもの。『好きな人を徹底的に汚したい』というのがあの人の性癖だったから仕方が無い事だし、そんな人と主従関係を結んだ私も、同じ位淫乱で変態だという訳よ」

「でも……」

「例えば普通の状態で縛られたり鞭で打たれたら痛いでしょ？」

「そりゃ、そうだよ」

「でもね。それがああるレベルの快楽と混ざると、やがて痛みを快楽として認識してそれがやがて快感に変わっていくの……。もうそうなると理性なんか吹っ飛んでしまうから、何でも出来てしまうの。それは人間の本能的な防御法なのかもしれないけど、その快感を一度知ってしまったと、止めようと思ってもまたやってしまうのよね。でも、最近やつとその連鎖から抜け出せたと思ったのになあ……」

「俺がまた淫乱な心を目覚めさせてしまったって訳かい？」

「ええ、『変態で淫乱な雌犬ハマーン』……この名前自体忘れていた位だったわ……」

「じゃあ、俺がその責任取ろうか？」

ジユドーの申し出に、ハマーンは一瞬驚き、一呼吸入れてから優しく答えた。

「ジユドーは本当に優しいのね」

「だって……このままじゃあんた……」

「安心して。今の私は一人じゃ無いから……。貴方は貴方の道を行くのがベストだと思うわ。それに、こういう事は時々やるから良いのであって、快楽に負けてエスカレートしていくと、本当に取り返しが付かない事になるわよ。私とシヤアはその一歩手前までいったけど……。それに貴方はまだ若いんだし、

こんなおばさんに人生を束縛される事は無いわよ」

その笑顔に、ジュードは思わず彼女をギュッと抱きしめてしまった。

「ハマーン……どうして戦争中にこういう姿を見せてくれなかったんだよ。そうしたら俺……少しでもあんたの役に立てたかもしれないのに……」

「ふふっ。あの当時は人に弱みを見せたく無かったし、立場的な事もあったから……。でもそうやってお互いが自分の考えをぶつけ合って戦ったからこそ、今貴方とこうやって楽しむ事が出来るのよ。そう考えれば無駄じゃ無かったわ」

「そうなのかい？」

「ええ、そう。以前の私は、私の意見に反対する者は排除していたけど、その私を凌駕する位の人間を待っていた事も事実……。それが貴方だったからこそ、最後の戦いで負けた時、私は身を引こうと思っただのよ。……結果的には死に切れずに今ここにいるけど……」

「じゃあ、俺はこれからどうすればいい？あんたみたいに地球圏の世直しをすればいいのか？」

「それは貴方自身が決めれば良い事よ。私は貴方のような考え方を持つ子供が育って来てるって判っただけで満足だから……。私と違って、まだ時間は残されてるわ……頑張んなさい」

「何か、励まそうとして励まされちまったね」

恥ずかしそうに鼻の頭をかくジュード。

「ふふっ。でも、今回の出会いは、不思議とは思わないわよ。出会うべくして出会ったんだと思うわ」

「……こんな事をする為にかい？」

そう言いつつ、ハマーンの前の穴と、緩くなった後ろの穴に指先を優しく挿入して揉み始めるジュード。

「や……あ……」

「本当に感度は抜群なんだね。そういう表情……好きだよ。ハマーン」

「私も……もつとこねくり回して」

ハマーンはそう言うと、ジュードにギュッと抱き付いた。そして彼の手で軽く絶頂感を迎えた。

「あつ、ああつ………!!」

全身の力が抜けてぐったりするハマーンに、優しく唇を重ねるジュード。ハマーンが快樂の余韻に浸った表情でこう答えた。

「私だけイカされるなんて……ずるいわ。私も貴方が快樂の中で悶えて発射するのを見たいな……」

「じゃあ、女王様の様な感じで責めてくれるかい？」

「いいの？私がサドの時は容赦しないし、ネオ・ジオンの時はそれでマゾに目覚めた男が何人もいるのよ」

「あんた、戦争中に何やってんだよ」

「毎日戦争がある訳でも無いし、たまには相手が欲しい時もあるの。もちろん周りに知られると困るから、絶対忠誠を誓う者に限ってたけど……ね」

「戦争って、人を狂わすって言うけど、それは当たってるのかもな」

「正気でなんかいられないわ。ましてや、私たちニュータイプは……」

寂しそうに言い放つハマーンに、ジュードは再びギョツと抱き締めた。

「でも、もう終わった事だよ。今は快樂だけを考えようよ」

「……判ったわ」

「じゃあ、今度は君が主導権を握るプレイをしてみたいんだけど……」

「私が貴方を責めれば良いわけね。でも私の責めは結構厳しいわよ」

「君にあんな事を強要しておいて、自分だけ高見の見物なんて出来ないって。では、よろしく。ハマーン。いや、ハマーン様」

その言葉の直後、ハマーンは戦争中のようなきつい顔に変わったかと思うと、こう言い放った。

「ふっ、良い覚悟だ。だが私は途中で泣き言を言う男が一番嫌いなのだ。注意しろ」

「は…はい…」

ジュードは一瞬自分の発言に一瞬後悔したが、それを実感するのはもう少し後の事だった。

*

*

*

Sなハマーン

ハマーンはバスルームにジュードを正座させると、すっと立ち上がり、蔑むような目で見下したように言い放った。

「では、まずお前に奴隷としての基礎を教え込もうと思う。いいな？」

「はい」

「まず、私には絶対服従を誓う事。判るな？」

「はい。誓います」

「なら、その誓いの証拠として、お前の下半身に生えている醜い毛を全部剃り落として貰おうかな」

「え……それは……」

ジユドーが躊躇していると、ハマーンの軽い平手が飛んできた。

「お前、私に服従を誓った直後だということにもう破るのか？お前をどうするかは、ご主人様である私が決める事だ。お前には選択権など無いのだよ。お前は私の言う通りに行動し、勃起させ、射精をする只の『物』に過ぎないのだ。いいか！それを忘れるな！返事は！？」

「はい。判りました……。ハマーン様……」

ジユドーはそう答えると、シェービングクリームと、安全カミソリを使って時々躊躇しながらも下の毛を剃り始めた。それをハマーンは自分の下半身をまさぐりながらうっとりとした目で見詰めていた。どの位経っただろうか。股間をツルツルにしたジユドーが言った。

「ハマーン様。作業が終わりました」

「ん？それどれ」

彼女は彼をバスルームの床に寝かせると、ペニスの周りから裏まで丹念に眺め始めた。その行動を見ているジユドーの股間が見る見る膨らんでいった。

「お前は見られるだけでペニスを固くするのか？」

「はい……。申し訳ありません」

「まあ、勃起しないよりはいいが……。それと剃毛する時はもっとしつかりと剃れ。ここを触ってみろ。まだそり残しがあるだろう？」

ペニスの上の方にジュードーの手を持つてくるハマーン。

「綺麗に剃れたと思ったのですが……」

「剃毛するのは初めての様だから教えてやるが、ヒゲを剃るのと同じ要領で、反対方向からも刃を入れなければ上手く剃れんぞ。それから、切れ味が悪いカミソリで無理に剃ると血だらけになる恐れがある。それも注意するんだな」

「はい。ハマーン様」

「ふふ、素直な心に免じてご褒美をあげよう」

ジュードーの勃起したペニスを口に含むハマーン。部屋中にジュードーが快楽に悶える声が響き渡った。やがてしばらくそれを楽しんだハマーンは、フェラを止めて彼の剃り残したペニス周りや、袋の部分の毛、それに手を付けていないお尻の穴周りの毛を綺麗に剃り上げた。ジュードーの下半身は、グロテスクに反り返っているペニスを除いて、まるで子供の下半身の様になった。ハマーンは、恍惚な表情を浮かべてもうろうとしているジュードーをバスルーム内にある鏡の前に連れて行った。自分の姿を見て、下半身に有るべき毛が無い事に異様な興奮を覚えるジュードー。ハマーンはそんな彼に後ろからもたれ掛かると、右手は彼のペニスをしごき、左手は彼の乳首を優しく摘んだ。興奮しているジュードーの耳元で彼女はそつと囁いた。

「どうだ？下半身の毛を剃られて、それを見て感じているのだろうか？……これがお前の本性なんだよ。普段は必死に隠しているけど、一皮向けは、お前も私と同じ淫乱で変態なのさ。どうだ……？ん？」

「そ…その通りです。自分がこれ程淫乱で変態だとは思いませんでした。ああ…気持ち良い……」
首筋を舐められ、息を吹きかけられて感じているジュード。やがて、彼の息が荒くなり、もう少しで射精するという瞬間、ハマーンはその手を止めた。

「あ……ああっ……」

射精したい衝動から、思わず体をよじらせるジュード。それを見てハマーンは薄笑いを浮かべながら囁く。

「どうした？出したいのか？」

「は…はい…」

ハマーンはそう答えるジュードの下半身を再びしごくのだが、絶頂感を迎える寸前になると手を止める、いわゆる『寸止め』がこの後何度も繰り返された。やがてペニスからミルクを出したくてたまらないジュードが、ハマーンに射精の許しを請うた。

「ハマーン様……お願いします。私の嫌らしいペニスから、ミルクを出させて下さい。もう出したくて気が狂いそうなのです！」

「ふふっ、ZZのパイロットにもなった男が、実はこんなにも淫乱な男だったなんて知らなかったよ。まさか自分から射精させて下さいとお願いするとは……な。本当に…俗物にも程がある奴だよ」

「ああ……」

快樂に言葉責めが加わり、ジユドーの心は今にも壊れそうだった。

「ネオ・ジオンで私が指導者に収まっている時にこのような関係になったのなら、お前を性奴隷として面倒見る事も出来たのだが、あいにく今は無理なので……。お前に壊れてもらっても困るし……。かと言ってまだこの位では物足りないし……」

ハマーンはそう答えるとジユドーを置き去りにしてベッド脇のモニターで何やら品物をオーダーするのだった。そしてしばらくして届いた物をバスルームまで持ってきた。長めのロープと首輪だった。

「じゃ、奴隷は奴隷らしい服を着させてあげるよ」

ハマーンはそう言うと、ジユドーの上半身から下半身に掛けて綺麗に縄掛けした。そして膝で歩かせるように足を折り曲げて、太ももの部分でグルグル巻きに縛ると、仕上げに首輪を付けた。再びその姿を鏡越しに見せるハマーン。

「どうだ？自分の姿は、アソコをツルツルして勃起させた上に、全身縄掛けして首輪まで付けて、これではどこからどう見ても淫乱なマゾ犬にしか見えないわねえ……」

「ああ……。は……はい」

ハマーンは彼に犬のチンチンの格好を強要した。すると鏡の中その屈辱的なポーズに感じている自分を見て更に股間を硬くするジユドー。ハマーンが試しに軽く擦ってみた。

「う……ぐうう……」

射精をお預けされている時間が長かった為、すっかり理性が飛んでいるジユドー。

「ジユドー。自分の変態な姿をみてどう思った？素直に言ってみるが良い！」

「はい。自分が……こんなに淫乱で変態な雄だという事を初めて知りました」

「正直だな。私は正直な男は好きだ。じゃあ、正直ついでにお前の性体験も話して貰おうか」

「はい。何でもお話しします。その代わり……話し終わりましたら……」

「お前の返答次第で考えてやってもよいよ。では、お前の初体験は幾つの時だったんだ？まさかシヤアと同じで自分の妹と……なのではあるまいな？」

「いえ……妹では……ありません。あれは……六歳頃に幼なじみのエルと廃墟でお医者さんごっこをしていた時に……。お互い裸になったら私のペニスが硬くなって、エルのあそこに穴があったので、意味も判らずに突っ込んで……気持ち良くなりましたが、射精はしませんでした」

「ふくん。それがお前の童貞喪失だったという訳か。で、その女とはどうなったのだ？」

「私が気持ち良かったので、その後も何度か関係を持ちましたが、友達に見付かりそうになって、そうしたらお互い罪悪感が芽生えて……それっきりです」

「その女はどうしたのだ？」

「私といつも一緒に、この前の戦いの時もMSに乗ってアーガマで戦っていました」

「その後は？」

「戦争が終わって、私は……木星に行つて、彼女は別な男とくっついて……でも直ぐ別れたみたいですが……」

「で、次の経験は？」

「やっぱり一緒に戦っていたルーという年上の女性で、一緒に木星まで行きました」

「お前は思い続けた幼なじみを捨てて、年上の体を採った訳だな？」

「はい。その通りです」

「で、その女とは毎日セックスしていたのか？お前のこの性欲なら我慢出来ないだろう？」

その言葉に、ジュードは悲しそうな表情を浮かべながら答えた。

「彼女は感じると凄く淫乱になるのですが、それ以外は極端に淡泊になって……それが元でささいな言い合いになる事もよくありました。『私の体だけが目当てなの！？』って何度言われた事か……。その割には嫉妬心がもの凄くて、溜まった性欲を他の女性どころかオナニーで出す事さえ禁じられました」

ハマーンはそれを聞くと、軽くジュードに口付けをした。

「辛かったか？」

「はい。木星での仕事も死ぬ程辛かったのですが……そんな環境の中で性欲を発散出来ない事があれ程辛い事だとは思いませんでした」

「私とシヤアがアクシズにいた時に、性行為がどんどんエスカレートしていったのも、今なら判るだろう？そして私が地球圏へ来た理由も……」

「はい。木星へ行って体験して、ハマーン様のお話を聞かせて頂いた時に、私の中で何か繋がる感じがありました。そして、今なら分かり合える様な気も……」

「それだけで充分だよ。ジュード……」

「ハマーン様……」

「もう射精しそうか？」

「数回擦っただけで出そうな感じですよ。お願いします……。許可を……」

懇願するジュードに対して、ハマーンは冷静に言い放った。

「ふふっ、私は考えるとは言ったが、許可すると言った覚えは無いよ」

「そんな……!!」

「と言ってもこのままでは気が狂うかも知れんから、少し落ち着く様な事をするでしょう」

「え？ 一体何を……」

ジュードが答えている間にハマーンは再びベッドルームに戻り、アイマスクと首輪用のリードを持ってきた。そして彼にアイマスクを装着すると、リードを首輪に装着し、それを引っ張ってベッドルームの方へ連れてきた。

「ジュード。これからお前に命令を与える」

「はい。で、私は何をすれば良いのでしょうか……」

ハマーンは一瞬ニヤリと笑ったかと思うと、ゆっくりと口を開いた。

「『番犬』だよ。お前にはこれからドアの外で番犬をやって貰おうと思っただけ。時間はそうだな……初めてだから十分で良いでしょう。もし誰かが部屋の前を通ったら、『ワン』と鳴いて威嚇するのだぞ。

あ、そうそうポーズはチンチンのポーズで行う事。判ったな？」

「……」

戸惑うジュードに対してハマーンは再び軽く平手を見舞った。

「返事は？」

「はい。判りました。ハマーン様」

余りの屈辱に、アイマスク越しではあるが、涙を流しているのが判った。ただし、そうされていても、下半身は大きく反り返って血管を浮き出しているのだが……。やがて、ハマーンは一端バスルームに戻ると、手にイチジク浣腸器の残りを持ってきた。そして、優しく言い放った。

「覚悟は出来たようだが、私に反抗した罰だ。お尻に一個入れてあげるよ。さあ、お尻を突き出してお願いするが良い！」

「はい。私ジュドーはハマーン様のご命令に全て従うと約束しながら、それに部屋の外に出て番犬の役目を仰せ付かったにもかかわらず戸惑い、心の中でそれを拒絶してしまいました。ですから、どうかこの私に罰をお与え下さい」

「よく言えたな。本当は二個入れようと思ったのだが、廊下に排泄されても困るから一個にしとくよ。ただし、漏らしたらお前のその口で掃除するのだぞ」

「はい」

その言葉をジュドーが言い終わると、ハマーンは彼の尻にイチジク浣腸を一個注入した。ストップパーが無いとは言え、股間は縄でがちりと固定されているので、大事にはならないだろうと判断したハマーンは、ジュドーを四つん這いに歩かせてリードを引っ張って誘導し、ドアの前に連れて行き、リードを外してドアを開けて周りに人がいない事を確認した上でジュドーにこう告げた。

「さあ、お前の意思で廊下に出るといい。ここで躊躇ったりしたら時間が延びる上に、お尻への浣腸が増えるだけだな。ふふっ」

選択権が無いと悟ったのは、手探りながらもゆっくりと廊下へ歩み出た。アイマスクをしているが、耳は聞こえるので、現在廊下に誰もいない事が判る。ほっと胸をなで下ろしたジュードはそのままチンチンの格好をして、ドアの側に陣取った。その時ハマーンが声を掛ける。

「では、今から十分頑張れば中へ入れてあげるからせいぜい自分の役目を全うするんだな」

「はい。判りました」

「あ、忘れていたよ。これは私からの差し入れだ」

ハマーンはそう言うのと、脱衣所から持ってきた自分のショーツを彼の頭に被せた。それも、クロツチの汚れている部分を丁度鼻へ当たるようにして……。今まで体験した事の無いプレイの連続に、ジュードの理性は完全に吹っ飛んでいた。

「くれぐれもお前のミルクでマーキングしないようにな。では、頼んだぞ」

そう言うってハマーンは部屋に入った。そして、ベッドルームにペタリと座り込むと、今までとは打って変わり、心配するような表情に変化した。

「またやってしまったわ……。ジュード……。大丈夫かしら？」

そうは思っても、プレイ中に危険レベルを把握しながらそれぞれの役目を全うする事がSMの暗黙の了解事なので、ハマーンはジュードならこれ位は耐えられると判断した上での事であった。実際、ハマーンはもしお金が尽きる事があったら、SMクラブでも働こうかと真剣に考えた程の腕前なのである。（実際はシヤアの援助が多額だったので、そこまでやる必要が無かったが……）

ハマーンは、放置プレイの間に、今までプレイした道具の残骸（ロープの切れ端や、殻になったイチ

ジク浣腸器等)を片付けると、髪にジュードのミルクが付着していたので、シャワーを浴びる事にした。そして、時間が刻々と過ぎていった。

シャワーを浴びて、髪を乾かして、ベッドでサービスのドリンクで喉を潤していたハマーンは、ジュードを部屋の外に出してから二十分以上経っている事に気付いた。慌ててドアを開けると、そこには膝をガクガクさせながらも、必死に言われたポーズを取っているジュードがいた。ハマーンは彼の頭からシヨーツを取り、彼の首輪に再びリードを付けて部屋の中へ誘導した。ヨロヨロと無言で四つん這いのまま入ってくるジュード。ハマーンは彼をバスルームに連れて行き、鏡の前に連れて行くと、リードを外し、次にアイマスクを外した。その場で女の子座りをしているジュードの口は半開きになっており、目はうつろで、ボロボロと涙を流していた。ハマーンはそんな彼を後ろから優しく抱きしめて濃厚なキスをした。

「よく頑張ったな。ジュード……今のお前はとっても愛しく見えるよ」

「はい……ありがとうございます。ハマーン様……」

「ちゃんと番犬の役目は果たせたのか？」

「はい。言いつけ通り果たしました」

ジュードはそう答えると、廊下で有った事を語り始めた。数组のカップルが脇を通り過ぎて行った事。好意的な事を言うカップルもいたが、あるカップルは自分の姿を見て思いつき軽蔑した言葉を投げ捨てて去って行った時は、惨めで悔しくて涙が止まらないのだが、それと同じ位感じてしまった事。また、あるカップルに興味本位でペニスを触られて、危うく射精しそうになった事を告白した。また、浣腸に

よる痛みには耐えられなくなった時は、射精しない範囲でペニスをしごいて必死にそれを紛らわしたという事も告げた。ジュードは、気軽な気分でのこの手のプレイを頼んだ事を、廊下で激しく後悔したらしいが、屈辱と、快樂と、痛みが混じって、今までは想像も出来なかった快感が体中を貫いて、一生このままでもいいという気さえ起こしたと告白した。

それを聞き終えると、ハマーンは彼をギュッと抱きしめて、再び熱いキスを交わした。そして立ち上がると唾液を垂らしながら彼にそれを口で受け止める様に命令した。一本筋の長い唾液が、ジュードの口の中へ飲み込まれていった。このプレイに、理性が吹っ飛んだ今の彼は心底陶醉し切っていた。

ハマーンはそんなジュードを見て、しばらく放置してみたが、やがて彼は時折体に力を入れて排泄感の苦痛耐える仕草を何度も見せた。その度に彼は自分のペニスをしごいて苦痛を紛らわしていたが、やがてそれも限界を迎えたらしく、弱々しい声と目線で彼女に懇願してきた。

「ハマーン様……ペニスも、浣腸も……もう限界です」

その言葉に、彼の目の前にしやがみ込み、頬を優しく撫でながら答えるハマーン。

「判った。ではまず射精する事を許可しよう。どうする？自分ですか？それとも私がしごいてあげようか？番犬の時間を多くした分、その位の事はやってあげるよ」

「ハマーン様が、私の汚いペニスをしごいて……下さるのですか？」

「ああ……嫌か？」

「いえ……何よりのご褒美です。お願いします、ハマーン様の美しい手で、私の汚いペニスからミルクを搾り取って下さいませ」

「ああ……判った」

そう答えたハマーンだったが、その際尿意を覚え、一瞬考えた末にこう話を続けた。

「そう言えば、お前は先程私にオシッコを飲ませたな。なら、まずは先にそのお礼をせねばならんな」

「えっ？は……い。判りました。私ごとき俗物な男がハマーン様の聖水を頂けるなんて……とても幸せな事……です」

ジュードは弱々しく答えたが、彼のペニスはその行為に興奮した様のか振り返っている上にピクピクと動いていた。それを見てハマーンが見下す様に言い放った。

「私が言っただけでまた感じているのか？この変態が！子供の様にツルツルのペニスなのに、反応だけは一人前なんだな」

「ああ……」

「俗物！淫乱！変態！マゾ！それらの言葉が今のお前にはぴったりだよ」

「は……はい。ハマーン様のおっしゃるとおりです。私はこんな事をされても……とっっても感じてペニスをギンギンにしてみよう俗物で淫乱で変態のマゾ男です！」

プライドをズタズタにされて、落ちる所まで落ちたジュードが、叫ぶように言い放った。ハマーンはそれを聞くと立ち上がり、ジュードの前に立って足を開き気味にして、片手でヴァギナを広げて尿道を彼の口の前になる様にした。

「出るぞ。しっかり味わって飲むのだぞ」

「はい……」

ハマーンのおシッコが、大きく口を開けるジュドーの中へ注ぎ込まれていった。最初はチョロチョロとであったが、やがてそれなりの量が一気に口の中へ入ると、順調に飲み込んでいた彼の口からおシッコが溢れ出した。それでも必死におシッコを飲む姿に、ハマーンは軽くイッてしまった。やがて全て出し終わると、ハマーンはジュドーにヴァギナを舐めておシッコを口で綺麗に舐め取る様に命令した。その部分をとっても愛しそうな表情で必死に舐めるジュドー。そして、それが終わるとハマーンは彼の背後に回り込んでこう言い放った。

「よく出来たな。では、今度こそお前のペニスをしごとしよう。自分が嫌らしく淫乱に果てる瞬間を鏡で存分に見るがいい！」

ハマーンはジュドーを鏡の前でM字の状態にすると、彼の後ろから手を回して、ペニスをしごき始めた。軽く彼の耳元で囁くハマーン。

「どうだ？気持ち良いか？」

「はいっ！気持ち……いいっ！」

縄掛けされている為、体に力を入れると、余計食い込むのだが、その圧迫感が彼に更なる快楽を与えていた。目をつむって歯を食いしばりながら必死に堪えるジュドーに対してハマーンが言い放った。

「しっかりと目を開けろ！そして、この淫乱で惨めな姿を目に焼き付けるんだ！」

「はい……ぐううう……もう……ダメです。……あああ……出るっ……！」

ジュドーの体が硬直して、ブルブルと震えた。その次の瞬間、彼のペニスから大量のミルクがドクドクと飛び出してきた。ハマーンはペニスのしごく動作をゆっくりと変化させ、彼が大きなため息と共に

に体の力を抜いた時にそれを止めた。手には飛び散ったミルクが付着していたが、それを彼の口元に差し出した。

「お前の体から搾ったミルクだ。味わってみろ」

言われるままに、ハマーンの指に付いたミルクを丁寧に舐め取るジユドー。

「どうだ？お前の淫乱な汁の味は」

「ヌルヌルして……臭くて……」

「興奮していれば美味しく感じるものさ。私のオシッコを飲んでる時はどうだったのだい？」

「温かくて……しょっぱくて……。でも味よりも快感の方が強くて……興奮してしまいました……」

「これがエスカレーターすると排泄物の臭いを嗅いただけで興奮する様になるよ。もつとも、お前をそこまで仕込むには時間が無いがな……」

「はい……」

ジユドーはゆっくりとその場所へ横になった。もう、座っている力も残って無いらしい。ハマーンは、彼の太もも付近を縛っている縄と、全身を縛っている縄を解き、こう告げた。

「全身の縄は解いたが、これから快樂の波が引いていく分、猛烈な排泄感が襲ってくる筈だ。私はベッドで待っているのです、事が終わったが綺麗に掃除してから私の元へ来るがいい。判ったか？」

「は……い」

「そう言えば、あれはあと何個残ってたかな？」

ハマーンは側にあるイチジク浣腸器の数を数えると、あと四個残っていた。そこで一個をジユドーに

注入し、残りの三個は家に帰って自分が楽しむ事にした。彼女は容器の栓を取り、もう反抗する気力すら無いジュードの尻にイチジク浣腸器の先端を入れ容器を一気に押し潰した。快感の余韻に浸って意識がもうろうとしているジュードがかすかに声を上げている間に、容器内の液体は全て彼の中に吸い込まれていった。腹痛はまだ起きてない様だが、浣腸された時の刺激で、彼のペニスだけはやや反応した様だった。

「じゃ、ジュード。先に行ってるよ」

「はい……。ハマーン……。様……」

力無く答えるジュード。それをとても愛しく見つめた後に、ハマーンはバスルームを出た。このホテルは、ベッドルームからバスルームがマジックミラー越しに見える構造になっていた。ハマーンはそこからジュードの動作を見ていると、やがて薬が効いてきたのか快感の波が引いて痛みが戻ってきたからなのかは判らないが、ムクリと起き上がると、お腹を押さえて痛みが始めた。その声が、バスルームから聞こえてきた。

「いた……。痛い……。痛い……。ああっ……。出る……」

その後、排便時のしゃがんだ姿を見ると、顔を赤くしながら排泄し始めるのだった。苦しそうな呻き声と、排泄時の音がベッドルームにも聞こえてきた。

「ううっ……。ううっ……」

彼の恥ずかしい姿を愛しそうに見ていたハマーンだったが、彼の呻き声が聞こえてくると、自然と手が胸と下半身に伸び、いつしか激しいオナニーに身を委ねていた。股間をまさぐり、指を前の穴に深々

と出し入れするハマーン。

「ああっ……いいっ……気持ちいい……。もうすぐ……。やっと彼と……。あああっ……。！」

絶頂を迎えては、更にもう一度と何度もオナニーを続けるハマーン。その行為は、ジュードーが排泄を終え、後始末をしてる間中繰り広げられた。

*

*

*

愛し合う二人

やがて、ハマーンがオナニーに疲れてうたた寝をしていると、行為と後始末を終えたジュードーが恐る恐る彼女を起こそうと揺すっていた。

「ハマーン様……ハマーン様……」

「ん？あっ……ごめん……寝てしまったみたいね」

寝ぼけた表情で答えるハマーン。

「処理が全て終了しました」

「お疲れ様」

そう答えると、乳首とラビアにしていたピアスを外した後、彼にベッドの中へ入る様促すハマーン。入るや否や、震えながらハマーンに抱き付くジュードー。

「もうプレイは終わったから、そんなに怖がらなくてもいいのよ。あれはプレイ中だけのお約束だしね」

「はい」

その従順な返事の様子に、ハマーンは少し刺激が強すぎたかも……と思ったが、あえてそれは口にせず、ただ無言で彼の頭や背中を撫でるのだった。そうしていると、やっといつものジュードーに戻ってきたらしく、彼の方からゆっくりと話し始めた。

「俺……今までこんなに屈辱的な事をされた事も無かったけど、こんなに頭が真っ白になるまでイッた事も無かったんだ。散々じらされて、ハマーンにペニスをしごかれて射精した時なんか、もうこのまま死んでもいいっ……って位、頭の中が真っ白になった」

「ふふっ。マゾ奴隷のプレイは気に入って頂けたのかしら？」

「ハマーンが上手くリードしてくれたお陰もあるけど、痛みとか屈辱感とかが快樂と重なって、脳内麻薬がドバドバと出て危険だね。癖になったらどうしたらいいんだろ」

「その時は、また私の所へ来ればいいわ。ただしこういうプレイは下手すると、エスカレートしていくから、最後は死ぬかもしれないわよ」

「俺はあんた……いや君を殺した様なもんだから、君に快樂の果てに殺されるのなら本望かもね」

それを聞くとハマーンがこう答えた。

「じゃあ、やめた」

「え？どうして？」

「私は貴方に夢を託したから死のうとしたんだもの。私が貴方を殺したら私自身が浮かばれないわよ」

「そりゃ、そうだね。ふふっ」

そして、どちらからともなく唇を重ね合い、行為に及ぶ二人。ジュードーがハマーンの体を首筋から徐々に胸元までじっくりと舐め回し、手を背中から腰へと優しく這わせた。

「ああっ……」

ハマーンのおえぎ声を聞いたジュードーは、彼女の左右の胸を念入りに舐め回した後、胸、へそ、そしてヴァギナへと念入りに舐め回すのだった。ヴァギナ部分はクリトリスから左右の陰唇を丁寧に舐め、舌を前の穴に這わせていると、ハマーンがうっとりとした様な声でこう言うのだった。

「ジュードー…下になって。疲れたでしょうから、私が上でサービスするわ」

「ああ……」

体制を変えてジュードーが寝そべると、ハマーンはジュードーをまたぎ、ヴァギナ部分を彼の顔近くになるような体制を取った。

「ジュードー。さっき縛られた跡が残っていて、とっても嫌らしい姿になってるわよ」

その言葉を聞くや否や、ジュードーの下半身は先程までの行為を思い出した様に大きくなった。それを見てハマーンが更に言った。

「ふふっ、何回も出してるというのに本当に元気ね」

ジュードーのペニスを愛しそうに舐め回すハマーン。ジュードーも、負けずに彼女のヴァギナをクリトリスをメインにして舐めまくった。二人の発する嫌らしい音とおえぎ声が部屋に響き渡った。

「あ……」

「ううっ……」

どの位その行為が続いただろうか。上で愛しそうにジュードのペニスをしゃぶっていたハマーンが、あえぎ声を出して、体を弓なりに反らし始めた。その美しくもエロティックな光景に、ジュードは更にクリトリスを中心にして舐め回した。

「ああっ。…そこ…そんなに強くしなくてもいいから、丁寧に優しくお願い…ああっ…！」

ハマーンの言葉通り、ジュードは強引には無く、強弱を付けて優しく舌を這わせた。やがて、ハマーンに何度目かの絶頂感が訪れた。

「あっ…イクイクイクイク…イクウウウウウウ！」

体をブルブルと震わせるハマーン。何秒かその状態が続き、彼女は大きなため息と共にぐったりとベッドへ倒れ込んだ。心配そうに覗き込むジュードを、ハマーンの手が優しく包んだ。そしてディープキスをしばらく交わすと、頬を赤らめながらこう言うのだった。

「そろそろ…！」

「…うん」

ハマーンが下になって足をM字に広げ片手で自分のヴァギナを広げ、ジュードが上になって反り返るペニスを手で押さえて彼女の前の穴に沿わせた。

「来て…！」

「じゃあ、入れるよ…。ん…あ…あっ…入ったかな？」

「うん。入ってる」

「ハマーン。愛してるよ」

「私も、ジュード……」

一つに交わった喜びを感じつつ、激しくキスを交わす二人。そして、しっかりと抱き合いながらも、下半身は必死にペニスを出し入れするジュード。ハマーンも、相手の体をまさぐりながら、腰を浮かせたり左右にくねったり、足を絡ませたりと快樂の波に身を預けていた。

「ああっ……ジュード……」

快樂の波に浸っているハマーンとジュード。体の相性が良いと言うのもあるだろうが、お互い毛を剃っている為、結合部が丸見えだったり、ジュードのペニスでハマーンのクリトリスを直接擦るまで密着出来るので、普通のセックスよりも興奮度が増している事も、また事実だった。

ジュードは当時ハマーンにもつと力を良い方向へ使えなかったのかと言ったが、今思えば彼自身ハマーンの事を何一つ理解する気が無かった事を、その後木星へ行って実際にその環境を体験してみても実感した。またルーと別れたのは、体の相性という面があったのも事実だが、それ以上に彼女はどこまでいってもエウーゴ（地球連邦）系の考えしか理解しようとしなかったのもその一つだった。もちろんそれは現実的な考え方だとも言えるのだが、ハマーンと直接戦ったジュードには、どうしてもそうやって割り切る事が出来なかったのである。

やがて、ニュータイプ同士なので、自然とお互いの思念が流れ合ってきた。それは、個人の快樂の上に他人の快樂まで重なってくるという状態になってしまふもので、結果的に至上の快樂を得られるのだが、その際他人の心の中まで見えてしまうとと言う弊害もあった。

もちろん、あえて心を閉ざしたりコントロールすれば、ある程度はシャットダウンする事は可能だっ

た。だが、その時のジュードの頭には、シヤアとセックスしている映像や、調教で快楽に浸っている映像が飛び込んできた。その瞬間、彼は腰を動かすのを止め、ハマーンに申し訳なさそうな目を向けた。ハマーンが不思議そうに問いかけた。

「どうしたの？ジュード」

「ハマーン。俺……君の心の中を覗いてしまった」

「あ……」

ハマーンもお互いニュータイプだという事を思い出した。彼女自身頭の中にジュードの映像が浮かんではいたのだが、快楽の波が心地よかったので、彼も同じニュータイプだった事をうっかり忘れていたのだ。一瞬の沈黙の後、ジュードがそつと話し始めた。

「俺は別に子供の頃の事や、今まで付き合った女性とのセックスしてるシーンが君の頭の中に見えたとしても、それは今まで歩んできた人生そのものだし、君に覗かれるなら一向に構わないとも思っている。でもハマーン、君の場合は俺とはまた考え方が違うと思うので……その……」

「黙っていれば判らなかつたかもよ」

「それはフェアじゃ無い。言いたい事……まあこの場合は見せたい事になるけど……は見せてもいいと思うけど、隠したい事をあえて覗くのはしたくないんだ。俺……」

「ふふっ、ジュード。貴方はいつになっても変わらないわね……」

「そんな事無いさ。あの後色々経験したし、君が軽蔑していた『ずるい大人』になっただろうし……」
そう答えるジュードに、ハマーンはそつとキスをした。

「私が最期の時に言った言葉……覚えている？」

「ああ……今でもはつきりと覚えてるさ。確か『帰ってきて良かった。強い子に会えて』だったと思うけど……」

「そう……。貴方はあの時持っていた心を軸にして、成長を続けているわ。例えば途中で、悩んだり、苦しんだりしても、それは考える事を放棄してないという何よりの証拠なのよ。私はあの時人間が地球を食い尽くすと言ったけど、貴方の様な若者が増えれば後の世に希望を託す事が出来るわ。私は復讐や過去の亡霊に取り付かれ、自分の置かれた立場故にそれを乗り越えていけなかったけど、貴方や私の子供達の世代ならきつと……」

「でも、俺は指導者になんてなる様な人間じゃない」

「大切なのは指導者なんかじゃないわ。個人の意思の持ち方が重要なものよ。そしてそれな集団となり地域となり国となる……。なぜなら指導者だけで改革しようとする、私やシヤアの様な行動を採るしかなかったってしまうから……」

「その言葉……今の俺なら判るよ……」

「そう言ってくれるジュードーだから……。私……。心に壁を作らないわ。私の全てを見て……。私の全てを感じて欲しい……」

「でも、そうすると君がシヤアやアムロとセックスしてる映像や、調教を受けている映像なんか……。そう答えるジュードーを、ハマーンはギユツと抱きしめて耳元でこう囁いた。

「愛し合う人だからこそ、私の全てを見て欲しいの。それに、全てを見られてると思うと、恥ずかしく

てとつても感じるから……。それとも淫乱で変態な行為をしている私を見るのは……嫌いかしら……？」
顔を真っ赤にして答えるハマーン。

「普段の強くて格好良い君も好きだけど、淫乱で変態な君もとっても魅力的だよ……」

「私も…今までで一番感じてるわ……」

「ハマーン」

「はい？」

「あのさ、今、この瞬間だけでいいから……俺は君だけの男になるよ。その代わり、君は……世界の誰の物でもない……俺だけの女になってくれないか？」

もちろんハマーンには彼が本気で言ってる事が判るし、自分も今のジュードーナ仲間では無く一生のパートナーとして充分過ぎる男になっているとも思った。だが、それはあくまでも自分を中心にした幸せであり、このサイド6という鳥籠の中には、ジュードーナという器は大きすぎるのだ。それが判るからこそ、彼女は彼を自分の元で縛り付けておく事は出来なかった。でも、それでも、この瞬間だけは彼の全てを独り占めしたいと、彼女の本能が切実に訴えていた。幸せの余り、涙を流しながら答えるハマーン。

「はい。ジュードーナ……。今の私は貴方だけの女よ……。そんな言葉を聞けて……私……本当に幸せだわ……」

「ハマーン……」

「気持ちいいっ……ああっ……」

「はぁ……俺も……気持ちいいよ……」

再び抱き合い、激しくセックスをする二人。お互いのあえぎ声、ベッドのきしみ音、そして二人の性器が擦れ合って発する嫌らしい音が部屋に響き渡った。体位を様々に変化させ、これ以上無いという快楽をむさぼり合う二人。その最中にハマーンが目をトロンとさせて全身汗まみれの姿になりながら言った。

「……体と心で繋がるって……はぁ……こんなに幸せな事なのね……。気持ち良すぎて……全身が性器になったみたい……」

「ああ、お互いの気持ちや快楽が混ざり合って……それが増幅されて……こんな気持ち良いセックスなんて……俺も初めて……」

ジュードも汗を吹き出しながら、今までに体験した事が無いセックスに身を委ねていた。規定の休息时间が過ぎて延長時間に突入しても、その行為は続いた。ジュードがそれまで何度も射精していると言う事もあるのだが、心と心が繋がっている為、射精感が襲ってくると、ハマーンの心が無意識にブレーキをかけてしまうのだった。ジュードもそれを判っていたのだが、自らの精神、肉体の限界まで彼女を愛し合っていたと思うので、あえてそれを妨げようとは思わなかった。

しかし、遂にその行為にも終わりがやってきた。ジュードが、快楽と疲労で朦朧としながら言った。

「ハマーン……俺……そろそろ……」

「ん……私の中に出して……」

体位を正常位に変えて足を絡ませた状態でハマーンが答えた。

「いいの？外の方が……」

「ううん。中に出して欲しい……。避妊薬は飲んでるからし、今日は安全日だから思いっきり出して欲しいの。それに……もし子供が出来たら、私が責任もって育てるから……」

「そ……その時は、俺も君と……ああっ……！」

「それは……出来た時考えましょう……私もう……」

動きが激しくなる二人。やがてジュードーが叫んだ。

「出るよ……ハマーン……！」

「きてっ！私も……イクウウウウウウウウ……！！」

お互いギュッと抱き合い、激しく痙攣を起こした。そして次の瞬間、ハマーンの中にジュードーのミルクが大量に放出された。その瞬間、二人の心と体は今まで以上に一つになる様な感じを受けた。

「ああ……ああ……」

射精感を得て満足感に浸りながら、グツタリとハマーンに覆い被さるジュードー。それを充分過ぎる位体内に感じながら、ハマーンも快樂の余韻に浸っていた。そして、どちらからともなく何度もキスをする二人。

やがて、彼女の横に体を移動したジュードーが言った。

「俺達……以前よりも解り合えたかな……？」

「ふふっ、私を抱いて、私の全てを覗いたのにな？少なくとも私は……解り合えたと思ったわよ」

その言葉に、ハマーンは彼の体を触りながら、妖艶な表情で答えた。

「そうだね。でも見てしまったから言うんだけど、本当に同情からではなく君が愛しいと思った。あの時は酷い事ばっか言って……本当にご免な。判って無かったのは俺の方だったよ」

「ううん。私も相手を判ろうとしなかったし……お互い様だわ」

「君があの時……死ななくて本当に良かった……」

「私も……こんな時が来るとは思わなかったわ。本当に……それだけは助けてくれたシヤアに感謝しなくちゃね」

「ふふっ、あの時ガンダムが動いたら、俺も絶対助けに行ってたって」

「本当かしら？」

「どうやら心を覗き切っていないみたいだね。何ならもう一回確かめてみるかい？」

「あら、私に降参したペニスが役に立つのかしら？」

「俺の俗物ペニスを舐めて貰っちゃ困るよ。少し休めば大丈夫だって。時間はまだあるんだろう？」

「延長時間に入ってるけど、もう一回位は……。そんな事言ったから、私の中の俗物も疼いてきたじゃないの。だから責任取ってもらおうわよ」

下半身から溢れ出るミルクをティッシュで拭きながら、ハマーンはジュードのペニスを口に含んだ。

その行為に慌てるジュード！

「ちょ……もうちょっと待って。……そうだ、一緒にシャワーを浴びようよ。お互い汗でベタベタだし」

「んもう。判ったわ。ジュードがそう言うなら……」

「ご免ね。なんか汗とミルクと排泄物の臭いがしてさ。男ってミルク出しちゃうとそういうの気になるんだよね。興奮してる時は全然平気だし逆に興奮するんだけどなあ……」

その言葉に、ハマーンは彼にそっと抱き付いて耳元で囁いた。

「私はシヤアにハードなスカトロの調教もたつぷりと受けたから、ジュドーが望むならしてもいいわよ。もつとも、意識が繋がったから私がどれ位の淫乱で変態なのかは判ってると思うけど……」

「いや、スカは……。君が浣腸に悶え苦しんで排泄物をひねり出す姿はとつても好きで興奮したんだけどね……」

「意気地無し」

「はい。俺はそれで充分です」

そう言い合うと、軽くキスを交わした後にお互い微笑み合いながら一緒にバスルームへと向かった。そして再び濃厚なセックスが繰り広げられた。その日はそれで別れたのだが、二人の関係はジュドーが休暇中の間、連日行われた。また、別れる前日は子供を預けて一睡もせずに一晩中激しく愛し合った。

ソフトな行為からハードな行為、更にSとMを交互に演じたりしながら、全身で、口で、前の穴で、そして後ろの穴でハマーンはジュドーのミルクを受け、ジュドーはそんな彼女を行為中何度となく昇天させた。そして少し休んだと思うと、再びどちらからともなく体をまさぐり合っていた。

命をかけて戦い合い、心と体が深く通じ合った間だからこそ、より深く、激しく快樂を求め合ったのかも知れない。お互い汗と愛液とミルクに体を汚しながら……。

エピソード

結局ジュドーが気にしていたハマーンの妊娠は無く、二人の関係はその日の行為から数ヶ月後の、一本の電話で終わりとなった。これ以上出会い、体を重ねてしまうと、お互いそれに溺れて落ちていってしまうのが判るからだ。ジュドーはそれでも良いと思っていた様だが、ハマーンの方が頑なにそれを拒んだのである。

『ハマーン・カーンもう死んだ人なの。今のアルテイシア・マイネはハマーンとは別人……過去に捕らわれないで未来に生きて……それがハマーンからの遺言よ』

電話での別れ際に、ハマーンはそう言って受話器を置いた。その後のハマーン（アルテイシア）と息子ハリーは平凡な家庭を満喫して、しばらくの間その地に留まり、やがて別の地へと移動していった。

ジュドーはその後木星資源採取艦ジュピトリスⅡを降り、それと同時にエウーゴを得て自動的に組み込まれた地球連邦軍をも除隊した。そしてシャングリラコロニーへと戻り、リイナを呼び寄せ、手持ちの資金でジャンク屋を買い取って生計を立てた。

後に、リイナが独り立ちした頃、同じくコロニーへ戻っていたエルに交際を申し込んで付き合い始め、二人でジャンク屋を運営する事になった。噂によると二人はその後結婚して子沢山になったらしい。常に笑い声が絶えない、元気な一家が運営するジャンク屋があると巷で噂になったのは、たぶんその事であろう。

*

*

*

ちなみに、ジュードーがエルに様々なハードプレイを要求したかどうかは確認されていない。だが、二人で仲良くアダルトショップから出てくる所を、彼を知る親しい仲間には幾度か目撃されていた。

ジュードーは、ジャンク屋で組み立てた改造MSの操縦や、加入しているコロニー自警団が持っている旧式MSの操縦は手がけるものの、最新のMSにはそれ以降一度も乗る事が無かったと伝えられる。

「俺は人殺しはしたくないんだ。でも、話し合う余地が全く無い場合は躊躇わず引き金を引くよ。人間、死んだらお仕舞いだからね」

自警団の飲み会の席で、彼が仲間と言った言葉である。

【完】